

♪♪ 女ひとり、蝦夷地で大きなトリを見る ♪♪

早矢仕 有子（企画責任）・岩見 恭子・白木 彩子

本自由集会における話題提供者は、北海道においてワシタカ・フクロウ類を単身見続けている女性たちである。白木は主にオジロワシを、岩見はトビを中心に北海道十勝地方の猛禽類を、早矢仕はシマフクロウを対象にそれぞれ10年以上研究を継続してきた。

猛禽類を対象にした調査研究は、開発行為の事前調査が鳥学会の発表を席卷していた一時の熱狂状態は峠を越えた感はあるが、ここでの演者たちは、その流れとは一線を画し地道な調査を継続してきた。猛禽バブル期の鳥学会大会では、寄生的情報収集に余念がない一部の参加者に悩まされ、自己の研究への興味が「営巣木の位置をピンポイントで知りたい」とか「この道路予定地に何羽生息しているのか」といった極めて実利的で限定的な方向に向けられることにとまどい、怒り、学会発表の場ですら調査地や行動圏、さらには生息環境の詳細さえ語れない不自由な状況にいらだち続けてきた。

一方、独力で個体および個体群に関する情報を抱え込みすぎていることに限界も感じつつある。その点では、論文での発表量の少なさは一重に各自の自己責任であるが、それ以外にも、個体群保全上の制約から公表しづらいが保全には不可欠な情報の扱いには常に神経を尖らせてきた。しかし、情報の独り占めは非生産的であり対象動物をより不幸にするだけだ。継続的な個体群保全は個人の努力に拠るものであってはならないし、そもそも不可能である。そこで、たとえばシマフクロウでは、研究者と行政が情報と危機意識を共有することで、生息環境の保全と復元への試行錯誤を繰り返している。ただし、研究者と行政による協調だけでは地域個体群保全は達成できない。さらに市民による保全活動へ展開させることが必須であるのだが、そのためには生息地等に関する情報をより多くの人々と共有せねばならない。これは絶滅危惧種の保全にとっては危険な賭けである。残念ながらトリを見に訪れる人々のモラルの高さを前提にした生息地管理は非現実的なのが現状である。「情報をいかに管理し誰と共有するか」、この問題を解決できないままでは市民参加型の保全活動は成功しないだろう。本当は仲間を増やしたいにも関わらず、秘密主義に閉じこもってしまうジレンマを解決する術はあるのだろうか？

本集会の内向きの開催動機は、我々が抱えているジレンマや苦境を打ち明けあい、会場からも含めて研究姿勢や成果を辛辣に相互批判した上で叱咤激励しあおうというものである。

しかし、本旨はもっと別にある。それは、各対象種の魅力と、同一個体(群)を長く見続けることの楽しさを、とくに研究を始めたばかり、あるいは始めようとしている人たちへ伝えたいという思いである。我々がバラ色の未来を提示できていないことに一因はあるのだろうが、長寿の大型鳥類とつきあおうとする奇特な若手研究者になかなか出会えないことを私たちは少し寂しく思っている。発信機や自動撮影装置で半年追い回しただけでは理解し得ない、ワシタカ・フクロウ研究の魅力を共有していただければ幸いである。

